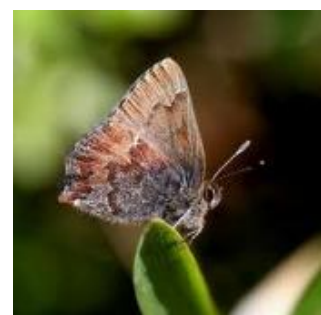


チョウの思い出

小嶋祥三

以下の文章は「蝶友」斎藤光太郎氏の求めに応じて、雑誌 **Butterflies** に執筆した文の一部もとにしていることをお断りしておく。私がチョウの採集を始めたのは小学 4 年生頃だったと思う。兄や兄の友達がやっていたので私も始めた。昭和 18 年生まれなので、戦後の貧しい中で育った。それゆえ、頻りに旅行に行く機会など無かった。小学校の林間学校で長野県の高原に行った時に捕虫網を振り回したくらいである。自動車で高速道路を一走りし、日帰りのしかし遠出の採集行など考えられなかった。数多く行ったのは東京近郊の稲田登戸（今はこう呼ばないかもしれない。小田急線の向ヶ丘遊園で下車した）の丘陵地帯だった。小学校や中学校で何回か表彰された記憶があるので、子供にしてはそれなりの収集だったのかもしれない。

私が最後に蝶の採集に行ったのは高校 1 年の夏、戸隠だったように思う。捕虫網で片手がふさがったまま「蟻の戸渡り」を超えるのは本当に恐かった（ここで同業の心理学者が転落死したとのニュースを憶えている）。この恐怖のせいではないだろうが、その後はチョウを見るだけで満足するようになった。捕まえようという気は稀にしか起こらなかった。そんな私だが、この歳になってもチョウについての記憶が鮮明なのは不思議だ。ミズイロオナガシジミを初台坂（このホームページ、『土地の記憶』を参照されたい）の途中の繁みで捕まえた記憶。アオバセセリをどこで採ったかと聞かれると、その時の光景が浮かんでくる。春浅い日にコツバメが枯れ草にとまって陽を浴びていたのも思い出す。これらは登戸での記憶だ。コムラサキの羽の輝きを捕虫網の中でみた感動、敏捷に飛ぶコヒオドシを咄嗟に網の中に捕まえたこと。これらは信州の高原での記憶だ。



左上より右へ
ミズイロオナガ
シジミ
アオバセセリ
コツバメ
下 コムラサキ
コヒオドシ

当時住んでいた初台・幡ヶ谷地区にもいろいろなチョウがいた。現在は杉並区に住んでいるが、初台よりも自然が残っている。それでも昔、数多く見かけたチョウがいなくなってしまった。都市化で生息環境が変わってしまったのだろう。そんな消えたチョウたちについて二、三述べてみる。戦災による焼け跡の草むらにはヒメアカタテハがヒメジョオンの花にとまっていた。現在のようにごみ収集のシステムがしっかりしていなかったので、いたるところで生ごみにキタテハが群がっていた。ゴミタメチョウなどという芳しくないあだ名をつけた。ルリシジミは色が明るく鮮やかなので、飛んでいるのをみてもそれと分かった（ハズキルーペの広告にでてくるシジミチョウはルリシジミだろうか？）。クロアゲハが多い中で、カラスアゲハは宝石のようだった。あの緑青色の光沢は忘れられない。ゴイシシジミ、ダイミョウセセリなど地味なチョウたちもいた。



左上より右へ、ヒメアカタテハ、キタテハ、ルリシジミ。左下より右へ、カラスアゲハ、ゴイシシジミ、ダイミョウセセリ

チョウの記憶の中で最も印象に残っているのは登戸の丘で見たアカシジミやウラナミアカシジミの乱舞である。夕暮れ時に丘の樹という樹の梢にこれらのチョウが活発に飛び交っていた。その光景をしばし呆然と眺めていた。その日は帰りが夜8時頃になったと思う。あまり遅いので、母親は警察に届けようかと思ったそう。無論、電話など普及していない時代の話である。私は私で、登戸に引っ越せばいいのにと思っていた（大学生の頃だったか、登戸の採集地を訪ねてみた。鉄筋のアパートが並んでおり別の意味で呆然とした）。

チョウを採らなくなっても、チョウを見かければ親しみを持って眺めたし、時には捕虫網が手にあったらと感じることもなくはなかった。私は20歳代の後半に愛知県犬山市のサルの研究所に赴任した。自然が残っており、またチョウたちが身近になった。私が住んでいた職員宿舎は東大の演習林の中にあり、食卓からキジが鳴いて羽ばたくのが観察できた

し、コジュケイの親子連れが藪を歩いているのも見る事ができた。犬山には東京の都心では見かけない多くの種類のチョウがいたが、目立ったのはウラギンシジミ、テングチョウだった。春先にはギフチョウもみられた。



左上 アカシジミ
ウラナミアカシジミ
ウラギンシジミ
左下 テングチョウ
ギフチョウ

宿舎に住んで大分経ってから、部屋の前の樹の梢に大型の橙色のシジミチョウがいるのに気がついた。5月の後半か6月の初めだったろうか。私は直ぐにアカシジミの類であることに思い至った。そして子供の頃の引越しの願望を思い出し、一人苦笑した。その多くはウラナミアカシジミで、まれにアカシジミが混じっていた。以来、毎年5月の半ばを過ぎると梢を見上げるようになった。宿舎のそばを愛知用水が走り、農業用の溜池もあった。その周りの林にもウラナミアカシジミがいた。池では釣り人が水面を見つめ、私は梢を見上げていた。夕方には活発に飛んでいたが（昼間はヨタヨタと頼りなく飛んでいた）、見かけたのはいつも10頭以内で、とても乱舞とはいかないのが残念だった。

チョウの採集をして良かったと思うことがある。それは自然を身近に、親しく感じられることだ。私は宿舎から研究所まで20 - 30分かけて徒歩で通勤することが多かった。林や池や田んぼを通る通勤路には多くのチョウやトリがいた。季節の移り変わりにこれらの動物が出退するのを眺めるのは楽しかった。トリでいえば、最後のツバメを見てから最初のジョウビタキを見るまでには2週間もなかった。ツバメは好きで、春に最初のツバメを見つけるのが、また初夏にヒナの巣立ちをみるのが楽しみだった。ヒナたちは親鳥が飛んで来ると羽を震わせて餌をねだった（ちなみに私は野球のスワローズのファンである）。チョウでは、春のギフチョウ、コツバメ、ツマキチョウ、初夏のアカシジミの類、秋のウラナミシジミ、イチモンジセセリなどは季節を感じさせるので好きだった。ただ、もはや希少種を求めるなどという気持ちはなく、普段身の回りにいるベニシジミやモンキチョウを親しみを込めて眺めた。



上、ツマキチョウ、ウラナミシジミ、イチモンジセセリ
下、ベニシジミ、モンキチョウ

犬山で初めて見たチョウにツマグロヒョウモンがいる。ユツタリ、ノンビリとヒラヒラ飛んでいた。そのツマグロヒョウモンを東京の杉並でしばしば見かけた。1頭は家の中まで入ってきて、ガラス戸でバタバタやっていた。地球温暖化の影響で北上してきたという。ヒョウモン類は高原でしか見たことがなかった。都心で見ることが出来るヒョウモンチョウ。さらに、ナガサキアゲハも東京で見られるそうだ（埼玉県の中着田で見かけた）。うれしいような、危ういような、複雑な気分である。



左より、ツマグロヒョウモン、ナガサキアゲハ

なお、画像はすべてネットで見つけたものです。掲載に問題があれば削除します。